



みんなで手を携え、支え合い、ぬくもりのある街にしていきたい。そんな思いを胸に、地域でグループで、生き生きと活動続ける人たちがいます。

安全なまちづくりを目指す 『守護大使』 『日本ガーディアン・エンジェルズ』札幌支部

繁華街を中心に防犯パトロールを行う「ガーディアン・エンジェルズ」は、世界十カ国で活動している国際的なボランティア団体です。平成七年の阪神淡路大震災などを契機に、日本本部が誕生。この春、国内八カ所目となる札幌支部が立ち上がりました。

「札幌支部のメンバーは、高校生を含む十七歳から六十歳までの四十人です。週末を中心に、常時二十人ほどでスキノなどを巡回しています」と話すのは、札幌支部長の富樫郁也さん。全体の調整を担いつつも、自ら精力的に現場へ足を運んでいます。

取材日は、夜桜見物でにぎわう円山公園のパトロール。

金曜夜の園内は、仕事帰りの会社員であふれています。午後七時過ぎ、総勢十三人のメンバーが二手に分かれ、ごみ拾いも兼ねたパトロールに出発しました。

雑踏の中でも、おそろいの赤いベレー帽とジャンパーはひときわ目を引きます。「赤いベレー帽は世界共通。安全なまちづくりの象徴です」と話すのは、パトロール部門のリーダーを務める淀野剛さん。その姿に気付いた見物客が、「巡回、お疲れさま」と気さくに声を掛けてきます。

夜が深まるとともに、園内の熱気も高まる中、ある団体の若者が何げなくたばこを捨てました。それを目撃した淀

野さんはすぐにメンバーに声を掛けよう指示します。「私たちには市民の皆さんを注意する権限はありません。しかし、見て見ぬふりをしない」をモットーに、柔らかく改善を呼び掛けるようにしています」と淀野さん。

こうした団体の活動方針を裏付けているのが、アメリカ発の「割れ窓理論」。これは、一枚の割れた窓を放っておくと、ほかの窓も次々に割られ、たちまち街全体が荒廃し、犯罪が増加するという考え方で「私がこの活動に参加した

のは、割れ窓理論に例えて言うとうと、自分のできるところから、ひび割れた窓を修復していきたいと思ったからです」と富樫さん。声掛けにより吸い殻を拾った若者に、明るくフォローするのも忘れません。

札幌支部では、今後、警察や住民組織と連携して、地域一体となった防犯活動を展開していく考えです。富樫さんは、「より団体の認知度を高めて、われわれの存在自体が予防的な効果を持つようになりたい」とパトロールの終わりに締めくくってくれました。



週末の円山公園を巡回する札幌支部長の富樫さん（右）とパトロールリーダーの淀野さん（左）。現在、札幌支部では会員を募集しています。詳しくは☎513-7227へお問い合わせください
ホームページ<http://www.guardianangels.or.jp>

広告欄